

『滴天髓』

何知章の項

『滴天髓』は、一三〇〇年代元代末から明代初期に活躍した劉基（劉伯温）によって著わされた書といわれていますが、著者が実際に劉基であったかどうかは文献考証的に定かではありません。

ここに掲げた原文は、二〇世紀初頭に袁樹珊により撰輯・校刊された『滴天髓闡微』を元にしています。『滴天髓闡微』自体は、一八〇〇年頃、任鐵樵によって公刊された『滴天髓』の評註です。

なお、以下「天道」「地道」「知命」「理氣」「配合」と小見出しがありますが、これらは任鐵樵か袁樹珊のいずれかにより追記されたものと考えられます。

また、「原註」とは、劉基による評註とされているものです。「任註」は任鐵樵による評註です。

※原文の下にある通し番号は、『滴天髓闡微』における原文の掲載順に対応しています。

何知章

この「何知章」では、それぞれの冒頭に「何知」という共通の表現が用いられていることから、印象的であるだけではなく、いつの時代にも共通すると思われる、経済的に豊かになりたい、出世したいという願望に対する答が述べられていることを期待させるところでもあるため、ここまで『滴天髓』を通読してきた人にとっては、待ちかねた項であると言えます。

何知其人富。財氣通門戸。⁷⁴

《何をか知るその人の富。財氣が門戸に通ず。》

※何…〈疑問詞〉なに。〈副詞〉反問の言葉。どうしてそんなことがあるのか。ない。

※知…〈動詞〉しる。しらせる。

※富…ゆたか。金持ち。たくさんの財産。

※門戸（モンコ）…家の出入り口。物事に立ち入るための入り口。家計。

【解説】

「私はお金持ちになれますか？」という問いに答えることが、『滴天髓』が著わされた頃から、四柱推命学の専門家には重要な問題であったことを知らされる一文です。

〈何をか知るその人の富。〉とは、「四柱推命学では何によってその人の経済的な隆盛を

知ることができるのか」という意味です。

この質問に対する『滴天髓』の解答は（財氣が門戸に通ず。）です。「財」は通変（日本には、生剋名、あるいは通変星・変通星という人もいる）の名称で、「氣」とあるのは、文字数合わせで特に意味はなく、「財」も「財氣」も同意と理解して差し障りはないでしょう。「門戸」とは「家の出入り口」の意ですから、推命においては「家」は日干で「出入り口」通変の食傷の意と解することができます。したがってこの句を意識するなら、「通変の財が食傷の生をうけ、日干に良好な作用をもたらす」といつていると解すべきでしょう。

通変の財は、その文字が示す意味の通り、金銭的なこと、経済的なことを見る視点として四柱推命において設定されていますが、実証的な見地から、通変の財⇨収入の多寡、という考え方は必ずしも成り立ちません。たとえば食傷が生財していても同じです。

古来より通変の財は、金銭的なこと、経済的なことを見る視点としか考えられてこなかったのですが、それでは一面的すぎ、誤りとさえ言えるのです。旧来の財の作用を否定する論は、日本・中国の書に類似したものを、寡聞ながら見ることはできませんので、独自の見解であろうと思います。

実証的には、財に剋される印も収入の多寡に深く関わります。さらに言うなら、日干の強弱との関わりの中、財と印の力量的なバランスが収入の多寡に関わります。

ですから、『滴天髓』のこの句で財と食傷にしか触れることなく「富」を論じているのは、実証的に受け入れがたいことと言えるのです。

ちなみに、一般的には、大運が良好であれば経済的に恵まれ、その反対であれば、経済的に困窮すると考えられていますが、これはすべての場合に適用できる考え方はありません。大運のよしあしと、一般的な意味での「運」のよしあしとは意味が異なります。ですから、俗な言い方をするなら、「運が好ければ儲かり、運が悪ければ儲からない」というのは四柱推命的には正確な表現とは言えません。

ごく普通にサラリーマンとして生活をしている人でさえも、収入と大運・流年の吉凶とか良し悪しは必ずしも一致しません。夜の日も見ず働きづめれば収入は増えます。それは、四柱推命から見るとよくない事象なのです。極端な例とはなりますが、一世を風靡し、億単位の収入があるような人のなかには、五行の視点からみると調和が崩れ、不良な大運にあることを散見します。

哲学の用語によって表現するなら、既往の四柱推命における吉凶の概念は形而上学的で固定的な価値観に縛られた封建時代の遺物です。四柱推命の根底には弁証法的なもの考え方流れていて、形而上的なものの考え方とは相対します。この違いを分別し、実証的な場面においても活用しなければ、四柱推命学を正しく理解することはできないと考えます。

ですから「運が好ければ儲かる」などといった世俗的な価値観を、四柱推命における既存の吉凶とかよしあしの視点に直結することは誤りなのです。視点を変えて言うなら、経済的に恵まれることは、その人が幸福を感じるための絶対条件ではないのです。

以上のような考え方は、とりあえず目先の吉凶を知ることさえできればいいと考えて四柱推命に関わりを持つようとしている人には、到底理解していただくのが困難な部分である

と思われませんが、四柱推命学とはこのようなものであり、また、これが人間のなりわいの真実であり、四柱推命学において実証的にも正しい考え方なのです。ですから繰り返しますが、この『滴天髓』の論に真理は含まれてはいるものの一面的すぎるため、誤りと言えるのです。

何知其人貴。官星有理會。

75

《何をか知るその人の貴。官星が理會をたもつ。》

※有：〈動詞〉存在している。たもつ。〈助詞〉さらに輪をかけて。その上に加えて。

※貴：たつとい。とうとい。貴人とは、身分が高い立派な人。

※理會〈理會〉：物事の道理を悟る。

【解説】

前の句と同様の表現をするなら、「私は出世できますか？」といった問いに答えることが、『滴天髓』が著わされた頃から、四柱推命学の専門家には重要な問題であったことを知らされる一文ということになります。

しかしながら、官吏・官僚になることが、当時の中国においては、ごく限られた出世の道であった時代ですから、現代の日本の社会状況から察することができないくらい、切実な思いの込められた問いであったであろうとは言えます。

さて、〈何をか知るその人の貴。〉とは、「四柱推命では、何によってその人の社会的な地位・名誉を知ることができるのか」といった意味です。これに対する『滴天髓』の答えは、〈官星が理會をたもつ。〉です。

〈官星〉とありますが、「星」は文字数合わせのため挿入されたもので、特に意味はありません。「官」とは、日干を剋す干で、陰陽の違いを考慮すると「正官」と「偏官」に分かれ、古来より正官は正道で、偏官は邪道といった意味合いが伴ったことが、人により、書によりいろいろあります。それは「正」「偏」という漢字が表現していることでもあります。ですから、『滴天髓』のこの句に「官星」とあるのは、正官のことであろうと思われる。しかし、日干の陰陽により、正官、偏官には、2×2、4通り関係が発生しますので、正官、偏官の作用を一括りにして評価するのは無理ですし、そうすることは誤りを招く一因ともなるとさえ言えます。そこで、日干の陰陽は後から評価することを前提に、正官と偏官をまとめて官殺と表示しておいたほうが妥当であろうと考えています。

さて官殺の日干を剋す作用に、官殺による事象を導き出す原理があり、それによると、「私心を抑え責任を全うする」「責務に耐える」といったものが導き出されることになり、このことが社会的地位とか名誉に結びつく要素を含んでいます。しかし、官殺があり、たとえその作用が良好で、〈理會をたもつ。〉と言えるような状態であっても、それだけで出世が約束されているなどは断定できません。

社会的地位とか名誉は、基本的には人から、そして社会から与えられるものです。人に業績を評価され、この人物は、その地位にふさわしいと評価されなければならぬ面があります。独創的なすばらしい業績があっても、毀誉褒貶の多い人物がいますが、そのような人物はここでいわれている「貴」の範疇に入らないこととなります。官という視点のみでは、人の地位とか名誉を断じることができません。

そもそも現在の日本に「貴」という概念は存在しないと言えます。官僚として出世したからといって、それを「貴」などと考えることはありません。「貴」に対するのは後述の「賤」となりますが、官僚以外の職業は賤しいなどといったことももちろん今の日本にはありません。職業の種類により貴であるとか賤であるとか論じることがはまったく無意味です。こうしたところにも『滴天髓』の古さを感じるようになるのです。

日本の四柱推命の書に、数百年前の中国の社会状況に由来する古い価値観をそのまま採用し、現代の人の四柱八字を、貴格、貴命、賤命、上格、下格、などと分類しているものを見かけますが、もう少し考えが及ばないのかと、ただただ情けなく思います。

何知其人貧。財神反不眞。

76

《何をか知るその人の貧。財神が眞にあらざるをひるがえる。》

※貧…〈名詞〉まずしさ。〈形容詞〉まずしい。財産がとぼしい。才能や学問がとぼしい。

※反…〈動詞〉ひるがえる。かえる。かえず。そむく。〈副詞〉かえって。反対に。逆に。

※不…〈副詞〉…ず。下の言葉を打ち消す否定詞。〈感嘆詞〉しからず。

※眞（＝真）…〈形容詞・名詞〉まこと。欠けることなく充実した状態。

【解説】

先に「富」が論じられ、ここで「貧」を論じていますが、富の見方に関する論述に十分な点があったのと同じ理由で、この「貧」に関する論述にも問題があることになり、解説に窮することになります。

また右文を意識するに際し、「財神反不眞」とある「反」の品詞をどう理解するかにより意味合いが多少異なってきます。副詞として訳すと「かえって」「反対に」となりますが、これでは何に対して「反対」なのか意味不明となりますので、動詞として訳するのが妥当であろうと考えられます。

貧富の論に問題はありますが、〈財神が眞にあらざるをひるがえる。〉といわれていることにわずかながら正理を感じさせられます。

つまり、既存の四柱推命では、四柱八字を見て、用神などという名目で喜忌とか吉凶を確定的に定めます。すると、日干強の場合、財は必ず、喜・吉となります。しかし、実証的には日干が強であっても財によりもたらされる現実の事象が、喜・吉となるとは限らないのです。

こうしたことが発生する理由は、財の干の陰陽、または四柱八字における干の並び方、そして大運にあるのですが、『滴天髓』では〈財神が真まこと〉いい、「財神が吉」「財神が良好」などと断定的に財の作用のよしあしをいつていないことに、表現としてより深いものを感じます。

何知其人賤。官星還不見。

77

《何をか知るその人の賤せん。官星がまみえずにかえる。》

- ※賤…〈形容詞・名詞〉いやしい(こと)。身分が低い(こと)。品性が劣っている(こと)。
- ※還…〈動詞〉かえる。円を描いて元の場所に戻る。振り返る。
- ※不…〈副詞〉…ず。下の言葉を打ち消す否定詞。〈感嘆詞〉しからず。
- ※見…〈動詞〉みる。みえる。まみえる。〈名詞〉みかた。考え。

【解説】

「賤せん」は「貴」に対峙する価値観です。「貴」のところ、その意味を社会的地位といいましたが、ここでいわれている「賤」は、「品性が劣り、社会的名誉とか地位に無縁な状態」の意と解すべきでしょう。

しかしながら、既述のように現代社会において、『滴天髓』にいわれているような「賤」に該当する概念は存在しません。あえて言うなら、一見立派な肩書きがあり、また経済力があつたとしても、私利私欲のためにしか行動できないような人が「賤」に該当すると考へることもできないわけではありませんが、これも封建時代の残滓ざんしでしかないと考えます。

また「官星」とありますが、「星」は、前文までと同様に文字数合わせで、「官」も「官星」も同意であり、おそらく『滴天髓』が著わされた時代背景を考慮するなら、正官のことを指しているものと思われず。

さて『滴天髓』は、「賤」について〈官星がまみえずにかえる。〉といっています。やや回りくどい表現です。「還」は「元に戻る」の意ですから、官殺の基本的な作用は日干を剋くすることですから、〈まみえずにかえる。〉とは、「官殺が日干を剋す前の状態に戻る」という意と解せます。つまり、官殺が日干を剋することができないということになります。

官殺が日干を剋すことの通常の結果は日干を弱めることです。ところがこの官殺の通常的作用を發揮することができないことを「官星がまみえずにかえる。」といい、この状態に陥ったなら、「賤」となると右の文はいつているのです。

これをさらに詳細に説明するなら、日干強の場合、印いんが介入することにより官殺が日干を剋することができない、あるいは食傷が官殺を剋すため、官殺が強い日干を弱めることができないうことをいつているのです。日干弱の場合はこの逆の条件になり、官殺が印を生じ、印が日干を強めているようであっても、印が財に剋され、財がまた官殺を強め、日干は官殺からの剋にさらされ、弱められることをいつているのです。

ただし、大運と流年などのほかの要素を一切無視して、以上のような状態になったからといって、「あなたは賤である」などと断定するのは誤りと言えます。「賤」という概念自体、現代社会においては無意味であり、そもそも存在しないからです。

日干強の場合、印によって官殺が日干を剋して弱めることができなくなるなら、官殺と強すぎる比劫の両方の望ましくない事象が複合的に発生します。日干弱の場合、官殺と弱すぎる比劫の両方の望ましくない事象が複合的に発生します。そしてともに印がその事象を悪化させる役目を担うこととなります。

事象は、通変が複雑に絡み合った状態を解きほぐすことで理解できるものです。『滴天髓』にいわれているように単一の通変だけで、「貴」とか「賤」とか看ることができるとは単純ではないのです。

『滴天髓』の論には参考になる点はある、とは言えるのですが、他の中国の古書と同様に、出刊から現在に至るまでの七〇〇有余年という歳月は、『滴天髓』ほどの名著さえ、その論に古さがあることは否めなくなっているのです。

何知其人吉。喜神爲輔弼。

《何をか知るその人の吉。喜神が輔弼をなす。》

78

※吉…〈形容詞・名詞〉よい。めでたいさま。さいわい。けっこうである。

※喜…〈形容詞・名詞〉よろこび。めでたい事柄。めでたいさま。

※神（シン・かみ）…日・月・風・雨・雷など、自然界の不思議な力を持つもの。こころ、精神。「喜神」とは、四柱推命の用語の一つで、日干に良好な作用を及ぼす五行・干のこと。

※輔弼…そばに寄り添って天子（皇帝）の政治をたすける。天子の政治をたすける大臣のこと。

【解説】

ここでいわれている「吉」とは、これ以前に述べられている「富」であり、「貴」であり、またこのあと述べられる「壽」のことを指すものと考えられます。さらに言うなら、人が幸いと感じる事象をすべて含んでいる概念と言えます。

「吉」となる条件は、〈喜神が輔弼をなす。〉といわれています。「喜神」とは、日干に良好な作用をもたらす五行・干のことです。原則論では日干が強であるなら、食傷・財・官殺、日干弱であるなら、印・比劫が喜神となります。

ここでいわれていることは、喜神とされる五行・干が単独で喜の作用を発揮することだけではなく、喜神同士で互助関係があることを含めて吉であるといっているのです。それが〈輔弼〉といわれていることの意味です。

例えば、弱い日干乙木を甲木がたすけるなら、喜神の甲木は日干に直接的に良好な作用を及ぼしていると言えますが、同じく喜神の壬癸水がこの甲木と密接な関係にあつて、甲木をたすけるなら、間接的に日干乙木をたすけることとなりますので、これは「喜神が輔

弼をなす。」と言えることになります。

しかしながら、喜神同士が助け合うだけでなく、時に忌神が喜神をたすけることもあります。詳細な説明は長くなるのでここでは省きますが、〈喜神が輔弼をなす。〉は正論ですが、場合によっては「忌神が輔弼をなす。」こともあります。このことにまったく触れられていないのは、片手落ちであると言えます。

しかし、『滴天髓』はたった八文字で深遠な命理を論述しているため、このような不備を指摘することはかなり酷なことと感じます。ひよつとしたら『滴天髓』の著者は、表現に不足があることを十分承知の上で、不足する部分を、この一文から気づいてくれる人が現われることを願っていたのではないかとも思われるのです。

何知其人凶。忌神輾轉攻。⁷⁹

《何をか知るその人の凶。忌神が輾轉として攻める。》

※凶：〈形容詞・名詞〉悪いさま。悪いこと。ひどいさま。災い。不吉なこと。

※忌：〈形容詞・動詞〉いむ。よくないとして避ける。はばかる。いまわしい。

※神（シン・かみ）：日・月・風・雨・雷など、自然界の不思議な力を持つもの。こころ、精神。「忌神」とは、四柱推命の用語の一つで、日干に不良な作用を及ぼす五行・干のこと。

※輾轉：くるくる変わって一定しないさま。寝返りを打つ。

【解説】

ここでいわれている「凶」とは、これ以前に述べられている「貧」であり、「賤」であることであり、さらにこのあと述べられている「夭」のことも含めていっているものと考えられます。さらに言うなら、人が幸いではないと感じる事象をすべて含んでいる概念と言えます。

『滴天髓』では「凶」となる条件は、といっています。〈攻める〉とありますが、その対象は右文には明示的に言及されていません。攻めるのは日干であり、また間接的に日干にマイナスの作用をもたらすことを攻めるといつているものと解することができます。

例えば日干が弱であるなら、形式的で単純な視点では、日干をさらに弱める食傷・財・官殺は「忌神」で、印と比劫は「喜神」になります。この前者の忌神同士において、食傷が財を生じ、財が官殺を生じ、忌神が忌神を強め合い、忌の作用を増強することが、〈忌神が輾轉として攻める。〉といわれていることの一つの解釈であり、もう一つは、忌神が喜神を害し、喜神さえその作用を発揮できない状態になることを〈輾轉として攻める。〉といっているのです。

前文に〈喜神が輔弼をなす。〉とありましたが、忌神においても同様の状態が発生するところがあり、場合によっては日干以外の他の四行すべてが日干に好ましくない作用を及ぼすという、救いたい状況もあり得るのです。喜神が日干の見方であり、忌神が日干と敵であるとするのが原則的な考え方ですが、大運・流年のあり方によっては、すべて忌神とな

るようなこともあるのです。

四柱推命の中には、四柱八字により、十干を用神・喜神・忌神に分け、十干それぞれ作用の良し悪しを固定させてしまう考え方がありますが、こうした方法や考え方では、ここでいわれている〈輾轉てんてんとして攻める〉、そして前文の〈喜神きしんが輔弼ほひつをなす〉の意味・作用を正しく理解できないことになることもあるので、より細密に、深く四柱推命を理解するためには、用神・喜神・忌神という概念を捨て去る必要があると言えるのです。

四柱八字に対する十干の作用の良し悪しは、大運と流年の変遷の中で常に変化する可能性があるものとしてとらえておかなければ、四柱推命によつて事象を正しく看るための出発点にさえ立てないことになるのです。

何知其人壽。性定元神厚。

80

《何をか知るその人の壽じゆ。性が定まり元神厚し。》

※壽（＝寿）：〈形容詞・名詞〉いのち長し。長命である。長生き。対語は「夭」で、若死にするの意。

※性：〈名詞〉生まれつきもっている心の動きの特徴。ひととなり。人や物に関わる本質。中にひそむもの。外形のもととなるもの。

※元：〈形容詞〉はじめの。もとの・おおきい。

※神（シン・かみ）：日・月・風・雨・雷など、自然界の不思議な力を持つもの。こころ、精神。

※厚（コウ・あつい）：〈形容詞〉あつい。丁寧なさま。心遣いが深いさま。程度がひどいさま。

【解説】

「私は長生きできますか？」といった問いに答えることも、『滴天髓』が著あわされた頃から、四柱推命学の専門家には重要な問題であったことを知らされる一文です。裏を返せば、このあとに「夭やう」の見方の説明があることからして、「私は長生きできますか？」という問いは、「私はいつ死にますか？」という問いと同等であり、密接に連関していると考えられます。

四柱推命学によれば、いつごろ病気となる恐れがあるということはわかりますが、その病気で死に至るかどうかまでは断定できません。その理由は、医学の進歩が第一であり、また、暮らしている地域の医療環境にも左右されるからです。日本で生活している場合と、あるいは他の国で生活している場合では、当然、医療技術、救急医療体制の差があるため、助かる場合、助からない場合の差が発生します。これは四柱推命学には関わらないことであるため、生死という究極の事象について、四柱推命学では残念ながら明確にその時期を断定することは、その理論的構成上あきらめざるを得ないのです。

不治の病とされていた病気を、医学の進歩により克服されています。こうした医学の進歩を無視して、生年月日時間から寿命を論じることとは無意味です。

ですから、四柱推命学でわかることは、いつごろ発病する危険があるか、またその程度はどれほどかに限定して考える必要があるのです。時代の移り変わり、医学の進歩を考慮しつつ、四柱推命学に接する必要があるのです。

また、死因は、大きく分類すると、病死、自殺、老衰、事故死、となりますが、病死、自殺、老衰については、四柱推命学の理解が及ぶ範疇はんちゆうにあります。本人に何も落ち度もなく事故死するような場合、例えば、歩道を歩いているにもかかわらず、居眠り運転の車に轢かれ、死に至る、といったことは、四柱推命学の理を超えた事件と考えています。

何知其人天。氣濁神枯了。

81

《何をか知るその人の天。気が濁り、神が枯れ、おわる。》

※天…〈動詞〉若死わかじににする。人が若くして死ぬ。〈形容詞〉わかい。しなやかでわかい。

※氣…天候や四時（四季）の変化を起こす元となるもの。

※濁…〈動詞・形容詞〉にごる。泥やあかがくつついてにごる。にごってきたなくなる。

※神（シン・かみ）…日・月・風・雨・雷など、自然界の不思議な力を持つもの。こころ、精神。

※枯…〈動詞・形容詞〉かれる。ひからびる。

※了…〈動詞〉おわる。ものごとくにさっぱりと結末がつく。〈助詞〉完了の意を表わす接尾辞。

【解説】

原註には、「氣濁神枯之命。極易看。」とあり、「気が濁り、神が枯れた命は、極めて看やすい。」として、「印綬が強すぎ日干が落ち着くところがない」「財と殺が強すぎ、日干に依る辺がない」「喜神と忌神が戦う」などその該当する例を挙げています。

一方、任註では、「氣濁神枯之命。易中之難看者。」とし、「気が濁り、神が枯れた命は、看やすいものもあるが、そうでないものもある。」と、異論を唱えています。

原註にある「印綬が強すぎ日干が落ち着くところがない」を少し変え、「日干が大変弱く印が強すぎる」とするなら正理と言えます。「財と殺が強すぎ、日干に依る辺がない」とあるのをまた少し変え、「四柱八字中において、日干の救いとなる干が孤立無援で大運・流年の中で簡単にその作用を失うようであるなら、日干は依る辺なくなり、生命に危険が及ぶ」とするなら、またこれも正理と言えます。こうした四柱八字は、こうした危うい状況を見逃すことがないように注意深く見る必要がありますが、かなり明らかで、わかりやすい部類に入り、原註にいわれている通りと言えます。しかしながら、任註にいわれているように、わかりにくいものもあることは事実です。

また考慮しなければならないのは、前述もした医学の進歩です。先天的な異常があり、以前ならたとえ生まれても夭折ようせつは免れないような場合でも、助かることがあります。手元にも、日本で先天的食道閉塞で生まれたにもかかわらず、生後すぐに手術することにより、何事もなかったように成長しているお子さんの実例があります。

また、何も異常がなく生まれて、少年期、青年期に命を失うような場合は、大運が深く関わりますので、先天的な異常による夭折とは別の視点から看なければなりません。大運が関わりますが、おおもとの原因は四柱八字にありはしません。

この『滴天髓』の一文で、〈気が濁り、神が枯れ、おわる。〉とあるのは、先天的な異常があるため夭折するような四柱八字に限定して、その見方の概要を述べているものと考えられます。少年期、青年期に命を失うような場合は含まれていないと考えなければなりません。

最終更新：06
12
27

06
11
29